

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：53801
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2017～2020
 課題番号：17K13407
 研究課題名(和文)エドガー・アラン・ポーにみるグローバリズムとナショナリズム 土地獲得をめぐる

 研究課題名(英文)Globalism and Nationalism in Edgar Allan Poe: Concerning acquisition of the landownership

 研究代表者
 高瀬 祐子(Takase, Yuko)

 沼津工業高等専門学校・教養科・助教

 研究者番号：30708433
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グローバリズムとナショナリズムがせめぎ合う21世紀的な視点から、エドガー・アラン・ポーの作品における土地所有権や国家的な欲望の分析を行った。その結果、ポーの作品において、同時代的な領土拡張主義を背景に、財産や所有権の曖昧さ、不確定さを浮き彫りにするような描写が多数見られることがわかった。さらに「黄金虫」など、地下に埋められたものに関するポー作品の想像力は、アメリカの国家的な欲望の矛先が地中や地下へと向かうことを予見している。
 また、ポーが生きた19世紀において、奴隷反乱に代表される内側から染み出す恐怖は、21世紀におけるテロの恐怖と、その構造において酷似していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカにおける土地所有権の曖昧性は、ネイティブ・アメリカンの排除をはじめとする史実からも明らかであり、国家的な問題を孕む。しかし、本研究でポーが作品において描いた所有権の曖昧性はアメリカに限ったことではないことがわかった。特に島は、そこに住みつき、長く暮らした者が所有権を得ることとなる。ポーがこのような所有権の発生する過程を描いたことは意義深い。また、ポーにとって、土地は地表だけでなく、地中・地下まで含まれると考えられる。19世紀における土地への欲望の矛先が、地下や地中を含むのであれば、これまでの領土拡張主義やマニフェスト・デスティニーを背景とする文学的研究を再検討する必要すら生まれる。

研究成果の概要(英文)： This study aims to investigate the possession of land in Edgar Allan Poe's works in the context that globalism is struggling with nationalism. Considering the description of the landownership on Poe's *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*, he had written not only the transition of proprietors but also the moment when the landownership was produced. I also examines the relationship between the passiveness and the activeness about terror in "Echoing the Sound of Terror: Terrorism in 'The Fall of the House of Usher.'"

In "The Gold Bug," Poe describes not the desire for the surface of the earth but in the earth. He might foresee the imagination of America that turns on underground resources or the treasures of Captain Kid. As a result of these studies, I gave presentations both in Japan and at International conferences, and then reflected the feedback into academic papers.

研究分野：アメリカ文学・アメリカ文化

キーワード：19世紀アメリカ文学 エドガー・アラン・ポー 土地所有権 ナショナリズム グローバリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究テーマについて検討し、計画を立てた 2017 年(研究計画執筆は 2016 年)は、グローバル化が席卷する一方で、イギリスの EU 離脱に代表されるヨーロッパにおけるナショナリズムの風はアメリカにおいてもトランプ旋風となって吹き荒れていた。グローバル化とナショナリズムを同時並行的に考察し、グローバル化によって浮き彫りになったナショナリズムを再定義することは現代社会を理解する上で急務であった。

エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)は、探偵小説や暗号小説の祖として知られるが、詩人、編集者としても才能を発揮した人物である。彼の作品の多くは短編であり、そこには編集者としての商業的な視点と大衆を意識した時代感覚が現れる。ポーの活躍した 19 世紀中葉のアメリカは 1823 年のモンロー・ドクトリンにはじまり、領土拡張主義の目を南アメリカ大陸へと向け、現代へとつながるグローバル化の一步を踏み出した時期である。その中で、パリを舞台にした物語を書き、ヨーロッパで広く人気を博しながらも、アメリカの人種問題やネイティブアメリカンとの戦争に高い関心を持ち、作品に反映させたポーはまさに、グローバル化とナショナリズムを併せ持つ作家だといえる。

しかし、アメリカで執筆しつつアメリカを客観視するトランスナショナルな作家としてポーを評価する研究はまだ十分に行われていない。また黒人奴隷制が根づく南部の封建的空間で多くの時間を過ごしたポーについて、人種差別主義者という観点から彼の作品のなかに人種差別意識や黒人への恐怖を読み解く先行研究が多数ある一方で、ネイティブアメリカンとの関連性は見過ごされている。よって、グローバル化とネイティブアメリカンの問題に起因するナショナリズムに焦点をあてた作品研究を実施することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)の作品におけるナショナリズムとグローバル化を土地獲得というテーマから分析することである。ネイティブアメリカンとのセミノール戦争やモンロー・ドクトリン、マニフェスト・デスティニーなどの政治的・社会的背景を踏まえ、ポーの作品に潜む領土拡張主義や対インディアン政策に対する批判を明らかにし、土地や空間の獲得に対するアメリカ国家の欲望を分析する。また、グローバル化とナショナリズムがせめぎ合う今日の世界的な現象を、ヨーロッパを舞台にしながら同時代のアメリカ国内の社会的背景に切り込む作品を数多く執筆した作家ポーの言説を通して分析し、19 世紀から現代を貫くアメリカ国家の土地獲得に対する欲望に新たな光を当て、21 世紀のアメリカ像を示す。

3. 研究の方法

本研究は、内容別に以下の研究を行った。

- A) 『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』と『白鯨』における所有権の表象について
- B) 「アッシャー家の崩壊」における音の表象とテロリズムについて
- C) 「黄金虫」におけるルグランの変貌と地中へ向かう欲望について

A)本研究の目的を明らかにするため、まずポー唯一の長編である海洋冒険小説『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』(以後『ピム』)に注目した。また、『ピム』だけでなく、『ピム』を大いに参考にして執筆したといわれるハーマン・メルヴィルの『白鯨』を取り上げ、19世紀アメリカを代表する海洋小説である両作における所有権に関する表象に注目した。まず、『ピム』における南氷洋の島々の表象と島の所有権の変遷及び所有権の発生する過程を追う。次に『白鯨』において、鯨の所有権に関する記述を抜き出し、両作品における所有権表象の共通点と相違点を検証した。

B)次に、「アッシャー家の崩壊」を取り上げ、「アッシャー家の崩壊」における音とテロの関係について分析を行った。まず、「アッシャー家」における音の描写を抜き出し、マデライン埋葬前と後でその描写がどのように変化しているかを検証した。次に、音の描写と、恐怖の関係を分析し、ロデリックがマデラインの出す音が聞こえながらも聞こえないふりをしていることを突き止めた。

C)アメリカの土地に対する欲望、さらにはその土地の表面だけでなく、欲望が地中に向かう様子を「黄金虫」の作品分析を通して明らかにすることを試みた。まず、サリバン島に関する歴史的情報(主に奴隷貿易に関して)の収集を行い、次に「宝探し」という行為について考察を行う。最後に、暗号解読の場面における言説を分析し、暗号解読と財産の関連性を示す。

4. 研究成果

本研究期間中である2019年3月に博士号を取得した。博士論文のタイトルを以下に示す。

Property and Inheritance in American Culture: Possession of Land in Nineteenth-Century American Literature

博士論文の内容は本研究以前から取り組んでいた内容も含まれるが、本研究のテーマの根幹ともいえるアメリカの土地所有権を中心に置いている。そのため、博士論文が提出できたことは、本研究の成果の一つといえると思う。特にエドガー・アラン・ポーの作品に関しては、「アッシャー家の崩壊」と『ピム』を取り上げ、博論の中で一章ずつ論じた。

以下、その他の研究成果については、「研究方法」で示した内容に即して以下に記す。

A) 『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』と『白鯨』における所有権の表象について

『ピム』において、主人公ピムはナンタケット島を出発し南下を続け南氷洋へ消える。閉じられた空間の中で進行することの多いポー作品の中では特異な移動距離である。さらにピムは南氷洋の複数の島々に立ち寄り、島の所有権が移り変わる様子や未開の島における所有権の発生する過程を描いている。特に、ある列島ではこれまでに様々な国の船乗りたちが立ち寄り、そこである総督がコミュニティを形成し、ピムが立ち寄った時点では、すでにそのコミュニティが大きく発展している点はアメリカの領土拡大の縮小版を見ているようで興味深い。さらに、最後にピム一行が訪れる島には先住民がおり、先住民と戦うことになるのである。

一方『白鯨』でメルヴィルは、鯨の所有権の話をしながらか、明らかにアメリカの拡張主義を批判し、所有権そのものの曖昧性を浮き彫りにする。領土を拡張し続けるアメリカ本土を尻目に、陸を離れた海の上やアメリカから遠く離れた島において、2人の作家が所有権について考察して

いる点は非常に興味深かった。この点を論じて、以下の論文にまとめた。

“Possession in Nineteenth-Century American Novels of the Sea: *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* and *Moby-Dick*”

論文概要：

19世紀を代表する2つの海洋小説『アーサー・ゴードン・ピムの物語』と『白鯨』を取り上げ、所有に関する描写を検証した。ポーは未開の島々の所有者が移り変わることに土地所有権の発生する過程を見てとり、メルヴィルは鯨の所有権について書きながら土地所有権の矛盾を指摘する。2人の作家はアメリカ本土を離れた海や島々を舞台とした作品において、土地所有権に関する曖昧性や領土拡張主義の暴力性を書き込んだことを論じた

B) 「アッシャー家の崩壊」における音の表象とテロリズムについて

「アッシャー家の崩壊」には音の描写が多く見られるが、その描写はマデラインを生きたまま埋葬する前と後では異なる。この点に注目し、ロ德里ックが、恐怖する側から恐怖を与える側へと変貌することを明らかにした。さらに、恐怖と音/声の関係が、現代におけるテロの構図と酷似していることを指摘した。以下の論文にまとめ、共著として発表した。

第1章「恐怖の音がこだまする 「アッシャー家の崩壊」に見るテロの構図」

『アメリカン・マインドの音声 - 文学・外傷・身体』（小鳥遊書房）

編著者：高瀬祐子、日比野啓、舌津智之、巽孝之

執筆者：下河辺美知子、佐久間みかよ、新田啓子、大串久代、権田建二、板垣真任、伊藤詔子

論文概要：

本論では恐怖と音の関係を明らかにし、恐怖の受動と能動の変遷を確認しながら、19世紀から現代まで網羅する恐怖の構図を読み取った。ポーが本作に描いた恐怖とは、同時代的な黒人反乱やネイティブアメリカンとの戦争であることは間違いないが、アッシャー屋敷をアメリカ国家全体のアレゴリーだとすれば、建国以前から9.11までを包括するアメリカの恐怖の構図を体現している。

C) 「黄金虫」におけるルグランの変貌と地中へ向かう欲望について

世界で最初の暗号小説として有名な「黄金虫」だが、舞台がサウスカロライナ州サリバン島であることに注目し再読した。サリバン島は北アメリカ最大の奴隷貿易港としても知られており、アメリカ的欲望の象徴的島である。その島において、黄金虫は暗号を解く重要な手がかりであるだけでなく、黄金に輝く金色の虫として財産の象徴として機能している。交換性においてのみ価値をうみ出す貨幣とは異なり、物質そのものに価値のある金と黄金に輝く黄金虫の表象を分析することにより、黄金虫の象徴的価値を探り、トランスナショナルな空間である島を舞台に本作が展開することの意義を考察した。

さらに、文学研究における大きな流れとして、作品と舞台となった場所との関係性に注目する論文や論集が数多く出版されたことが「黄金虫」の分析においても大変役立った。ポーに関連したものでは、2018年にPhilip Edward Phillips編による論集 *Poe and Place (Geocriticism and Spatial Literary Studies)* が出版され、ポー作品における場所に注目が集まった。一方、この論集においても、「黄金虫」の舞台であるサリバン島についてはほとんど触れられていなかった。本作において、宝探しをするルグランたちの欲望の矛先は、土地ではなく地中に埋められ

た財宝である。もともと見えない地下や壁の中に何かを埋める／埋まっていることにポーほど興味・関心の深かった者はいないのではあるまいか。「黄金虫」でポーが描いたのは、地中に埋まる死体ではなく、金銭へと交換可能な宝だったのである。

「黄金虫」に関しては、2019年11月にサンディエゴで開催された Pacific Ancient and Modern Language Association において “Legrand As a Zombie or a Vampire: Reinterpreting “The Gold Bug” as one of Poe’s Revenant Stories” というタイトルで発表を行った。この発表では、ルグランが黄金虫に噛まれることによって変貌したことに注目し、ポーの他の再生譚との比較検討を行った。本発表を出発点とし発展させ、現在論文を執筆中である。論文では宝探しという行為と暗号文というシニフィアンが、場所というシニフィエを指し示す過程の分析を行う予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高瀬 祐子	4. 巻 22
2. 論文標題 Possession in Nineteenth-Century American Novels of the Sea: The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket and Moby-Dick	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 成蹊英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuko Takase
2. 発表標題 Legrand as a Zombie or a Vampire: Reinterpreting "The Gold-Bug" as One of Poe's Revenant Stories
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 下河辺美知子、高瀬祐子、日比野啓、舌津智之、巽孝之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 アメリカン・マインドの音声 文学・外傷・身体	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------